




# 敗戦者 **Pr** 図鑑

Collection of the defeated!!









これは静かで穏やかな午後。爽やかな風がガラル地方に吹いている。しかし、急にとある少女が空に出現した。その自信に満ちた目で大陸を見回っている。


「たっか〜い！町がこんなにも小さくなるなんて！これを征服するのか？」

数千メートルの上空にいたら、地面にある全てのものがとても小さく見えるのはおかしくないが、この少女なら、たとえ地面にいても変わらないんだ。興奮と情熱を込めた少女は深呼吸して、風に迎えて体を広げる。その瞬間、太陽のような眩しい光が、ガラル地方の住民たちの目を奪った。









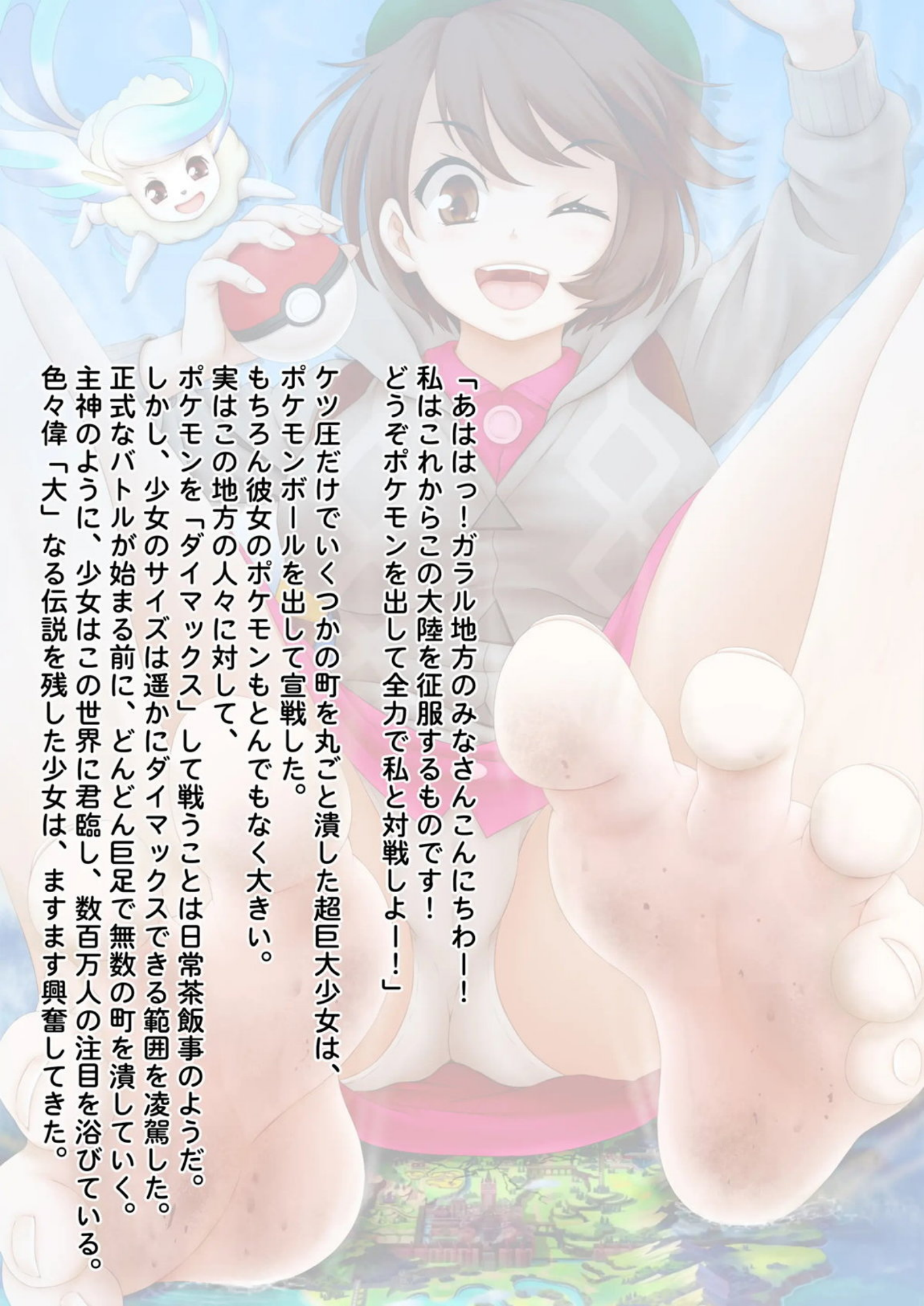
あつという間に、いつもガラル地方を照らしている太陽が消えた。  
のんびりしている人々は空から落ちてきた巨大な影を見上げ、全員言葉を失った。  
影というより、純粹無垢な白といった方が正しいだろう。  
その正体はなんと、少女のパンティーである。  
しかしこのパンティーは空に広げ、まったく境界線が見えない。  
少女の股間にある微かに見える隙間すら、  
人々に対しては逆さまに浮遊している峡谷みたい。不意に吸い込まれる錯覚を与えている。

だが錯覚だと思ったら大間違いだ。  
何故なら、少女のお尻が地面に衝突したら、町が簡単に崩壊してその隙間に埋もれた。  
それに、超弩級ケツ圧に伴う衝撃波は、世界を一掃する。  
小さな町はパンティーのシワにぶつかり、無数の屑となり綺麗に散る。









「あははっ！ガラル地方のみなさんこんにちわー！  
私はこれからこの大陸を征服するものです！  
どうぞポケモンを出して全力で私と対戦しよー！」

ケツ庄だけでいくつかの町を丸ごと潰した超巨大少女は、  
ポケモンボールを出して宣戦した。

もちろん彼女のポケモンもとんでもなく大きい。

実はこの地方の人々に対して、

ポケモンを「ダイマックス」して戦うことは日常茶飯事のようにだ。

しかし、少女のサイズは遥かにダイマックスできる範囲を凌駕した。

正式なバトルが始まる前に、どんどん巨足で無数の町を潰していく。

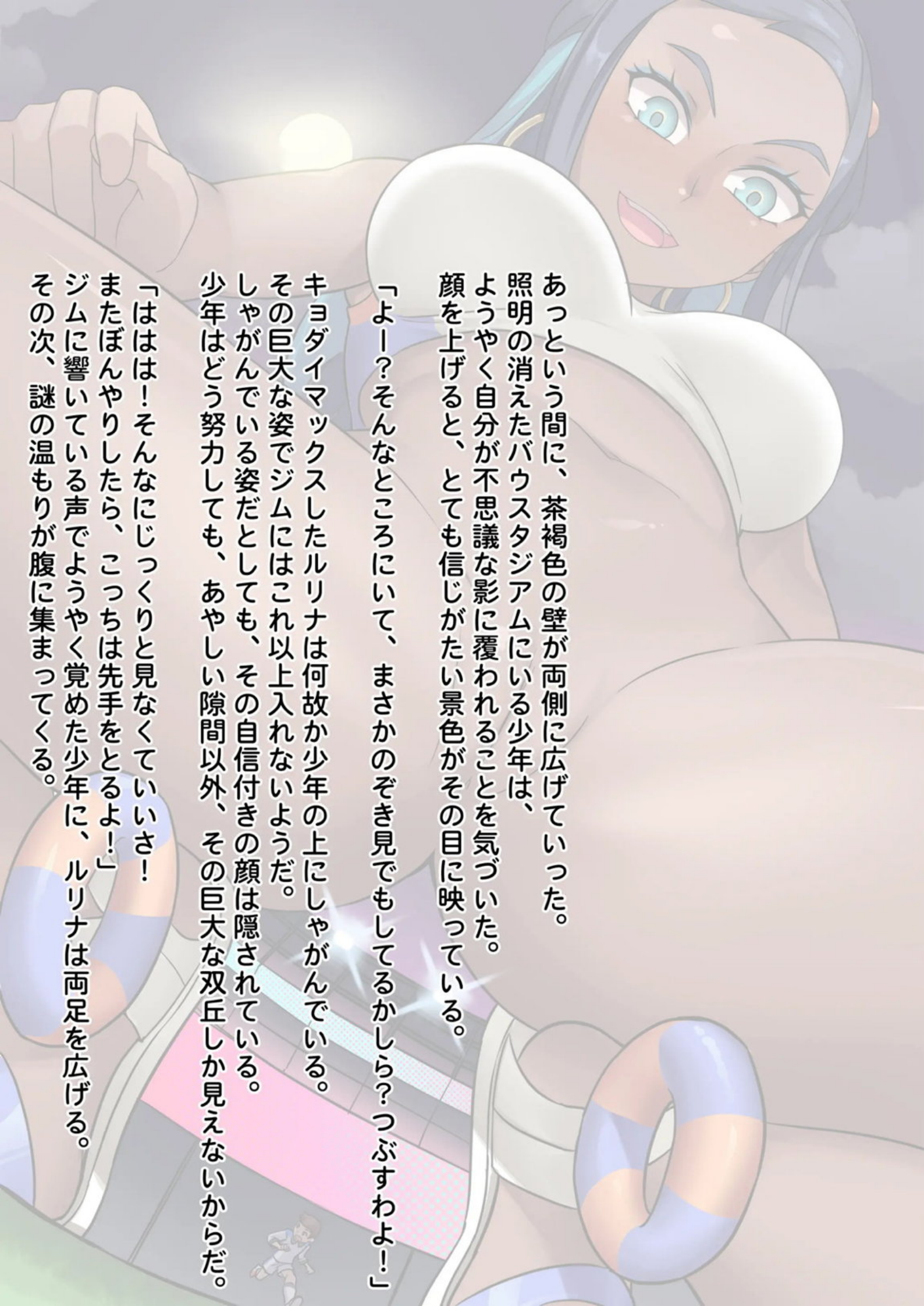
主神のように、少女はこの世界に君臨し、数百万人の注目を浴びている。

色々偉「大」なる伝説を残した少女は、ますます興奮してきた。









あつという間に、茶褐色の壁が両側に広げていった。  
照明の消えたバウスタジアムにいる少年は、  
ようやく自分が不思議な影に覆われることを気づいた。  
顔を上げると、とても信じがたい景色がその目に映っている。

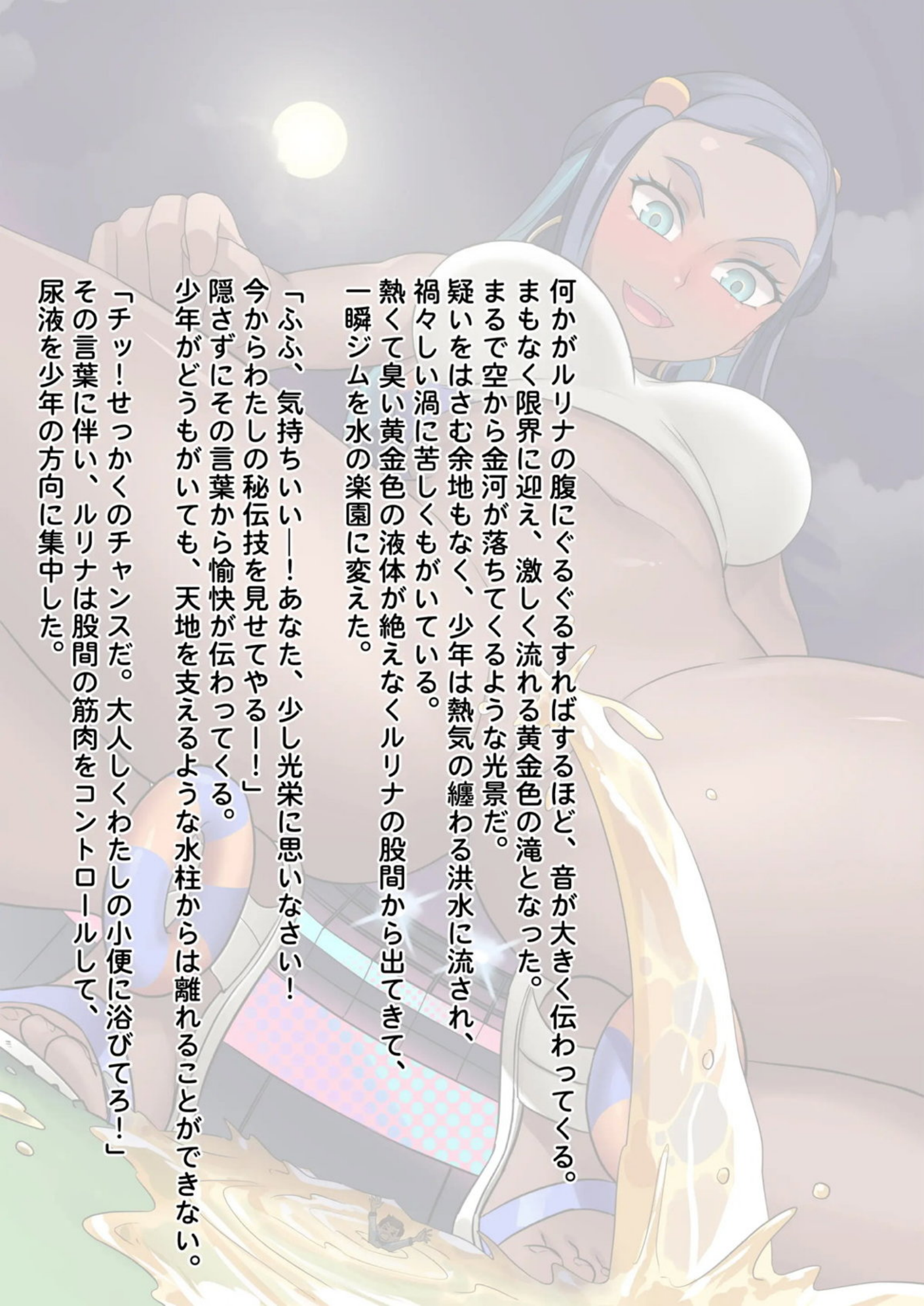
「よー？そんなところにいて、まさかのぞき見でもしてるかしら？つぶすわよ！」  
キョダイマックスしたルリナは何故か少年の上にしゃがんでいる。  
その巨大な姿でジムにはこれ以上入れないようだ。  
しゃがんでいる姿だとしても、その自信付きの顔は隠されている。  
少年はどう努力しても、あやしい隙間以外、その巨大な双丘しか見えないからだ。

「ははは！そんなにじっくりと見なくていいさ！  
またぼんやりしたら、こっちは先手をとるよ！」  
ジムに響いている声でようやく覚めた少年に、ルリナは両足を広げる。  
その次、謎の温もりが腹に集まってくる。









何かガリリナの腹にぐるぐるすればするほど、音が大きく伝わってくる。まもなく限界に迎え、激しく流れる黄金色の滝となった。まるで空から金河が落ちてくるような光景だ。疑いをはさむ余地もなく、少年は熱気の纏わる洪水に流され、禍々しい渦に苦しくもがいている。熱くて臭い黄金色の液体が絶えなくルリナの股間から出てきて、一瞬ジムを水の楽園に変えた。

「ふふ、気持ちいいー！あなた、少し光栄に思いなさい！  
今からわたしの秘伝技を見せてやるー！」  
隠さずにその言葉から愉快が伝わってくる。

少年がどうもがいても、天地を支えるような水柱からは離れることができない。

「チッ！せっかくのチャンスだ。大人しくわたしの小便に浴びてろ！」  
その言葉に伴い、ルリナは股間の筋肉をコントロールして、  
尿液を少年の方向に集中した。





291

X  
WORLD



「ふふ…その勇気を褒めてやろう。」

でも、闇に喰われる運命から逃れられない…」

キョダイマックスしたオニオンがシュートスタジアムにしゃがんでいる。

巨大な両手は夜空まで切り裂いてやる勢いで舞でいて、

そのせいで周囲の気温は一瞬氷点下になった。

それでも少女は恐れない。

深淵より這い上がる、チャレンジャー全員を潰す両手に向けて、

最高に凛々しく見える。

「ふん、ジムリーダーとは言え、所詮子ども！  
きつと『アソコ』はまだ開発されてないでしょ？」

せつかく大きくなってくれたし、このままあそこに入ってやるよ！」  
「えっ？」

相手がまったくオニオンの鬼のような姿を恐れないのは、  
流石に本人の予想を遥かに超えている。

逆にホラーを作るせいで、自分の行動が遅くなっていた。  
気づいたら、少女は自分の股間にいた。

「ま、まって！何を企んでいる？ひゃ——！」

291


X  
Wild











「やっぱ開発されていない新品だね！みんなも手伝って！」  
少女はキョダイマックスしたポケモンたちを出し、  
全員でオニオンをズボンを下した。  
目に映るのはピンク色で、明らかにまだ開発されていない亀頭だ。  
それでメスポケモンたちの母性が蘇り、興奮し始める。

「あはは！全身から冷気を出してるけど、ここだけは暖かいね！」  
「や、やめてよ！ひゃっ！」

震えているオニオンの亀頭に少女が登ったおかげで、  
とてもかゆくて痛く感じる。  
キョダイマックスしたポケモン二匹はお互い巨乳で陰茎を挟んでいる。  
その視線にはまったく貪欲さを隠さない。  
すでに抵抗能力を失ったオニオンは、初めての腺液を出した。

「もうダメ——いやあああ！」  
オニオンの性器が大きく震えていて、感度はマックスに到達した。  
その可愛い喘ぎ声に伴い、大量な精液が会場に発射した。







「クツ…あたしは負けない！」

明らかに負けたマリイの体はいきなり膨らんできて、あつという間に会場の屋上ほど高くなった。

「ダイマックスが使えなくても勝負の駆け引きは楽しめる…あれ？も、もちろん！あたし正々堂々と戦ってるよ！」

だって、あたしはポケモンじゃないし！

キョダイマックスしても問題ないでしょ？」

どうやらライバルの前に言い訳しているマリイは、どうしても勝ち取りたいみたいだ。

「あ、もうどうでもいい！決着が付いた。

これからあなたに奉仕の命令を出すか、おもちゃにするか、全てこの勝利者——あたしの特権！今すぐ負けを認めなさい！」

「きよきよ巨大なマリイちゃんだああ——！！」  
「え？」

マリイの困惑にもかかわらず、

少女はいきなり興奮な叫びをしてきた。

どういうこと？訳わからないまま、

小さな少女が自分の股間に突っ張ってくるのを呆然と見ている。







「な、なにしてんの？やめて！まだ試合中だよ！」  
虫ほど小さい少女は愉快な笑みを浮かべ、  
マリイの股間にすりすりし始める。  
地面に座っている無防備なマリイは  
どう足を揺らしても抵抗できないようだ。  
キョダイマックスしたマリイに対して、  
少女はようやく本当の一面を示した。

「すーはー！マリイちゃんの匂いだ！  
マリイちゃんのパンツだ！もう更衣室に潜入する必要がないわ：  
この美しいパンツ、わたしが独り占めしているぞおお！」  
「いつも更衣室の外であやしい音をしているやつはあんたなのか！  
ま、まってー！」

「は、はやくわたしを靴に入れて、  
その足指でわたしをめちゃくちゃにして！  
もう待ちきれないんだから！」


「ヘンタイだあああああああああ！」

キョダイマックスしたマリイの顔が赤くなると、  
周囲に大量のホルモンを出した。  
その強烈な匂いに魅せられた少女は更に力を入れ、  
自分とその隙間に入ろうとしている。  
今のマリイはまさに蜂をひく花のようで、  
もう少女の支配から逃げられない。









「援助待ちの人たちはどこにいるだろ？  
よく見えないよね。」

「山にある積雪を一掃したらどう！  
それでより早くあいつらを見つけれれると思う！」

氷雪の山に閉じ込められた人たちを助けるため、  
少年と少女は救助行動に参加した！


体は大きくなり、山頂も足に及ばぬ程度になった。  
それに、彼たちは自分の靴下の脱ぎ、  
アツアツの足を出した。

一日中靴下に囲まれた両足は絶えなく蒸気を出している。  
そのせいで雪山にある氷雪は一瞬消え去った。  
溶解による大洪水は問題になるかもしれないが、  
救助のためだから仕方ないさ。









洪水が山のふもとにある町を襲ってくるとき、少年と少女の両足はまだ山頂にかけている。

熱気が山に積り、やがて妙な臭気をする霧となった。中に入った人は熱気に耐えても、その異臭によって絶対一瞬で気絶するだろう。


「うん。そろそろだろ？雪はもう全部消えたよ。」  
「でもまだ人たちを見つけていないな。」  
「いっそ踏んじやおうか。」  
「これであいつらがわたしたちの足に登れるから。」

少年と少女は足指を掻きまわしつつ、  
ゆっくりと踏んでしまった。  
山々が雑巾として扱われている。









「みなさんこんにちは！鎧の孤島から帰ってきたよ！  
修行の成果を示すため、みなさんどうぞ遠慮なく戦ってください！」  
「試練を達成するために、みなさんの応援が必要なんだ。」

突然、黄色修行服に身を包んだ少年少女は、  
町の中心でキョダイマックスした。  
周囲の建物はその衝撃で粉々になり、  
煙幕に現れるのは数百メートルの巨人二人。  
雲にそびえる姿を見て、町の住民が動く勇気すらなくなった。  
その次に、一柱の巨足襲ってきて、町とともに人々を潰してしまった。

クララ先輩の言葉「ジム百個征服せよ」によって、  
少年少女は試練の旅に出た。  
正常の姿でジム百個挑戦するのは流石に疲れるだろ。  
でも二人は鎧の孤島でダイスूपに関する秘密を知った！  
レシピを調整すると、ポケモン以外の生物にも効くらしい。  
あれは彼たちがキョダイマックスできる理由だ。  
まだ破壊による煙幕は消えていないけど、二人の足は止まらない。  
少年がジムに到達する直前、  
少女の巨足が轟きながらジムを潰しちやって勝利を得た。

「あっ！ずるいよー！」  
「別にずるをしてないよ！悔しいなら次の町で勝ってなー！」















勝利の喜びを抱え、少年と少女は次の町に来た。

高層ビルが林立する現代風の町に、ジムはきつとどこかに隠れているのだろ？

でもその看板は今のサイズの少年少女にとってとはとても見づらい。

そして彼たちは適当に探さなく、あやしいところを全部破壊するのを決めた。

突然の地震に驚愕している住民たちは反応する暇もなく町とともに空に飛ばされた。

「えーい！あ、ポケモンセンターだったのか？

思いつき蹴っちゃったわ！」

「やばっ、フレンドリイシヨップまで壊しちゃった。

これで回復アイテムも買えないじゃない。」

「たぶん大丈夫？今のわたしたちなら、回復アイテムはいらないでしょね！」



数分後、町のビルは脆い積み木のように崩され、あっちこっちに落ちた。

ジムもすでに破壊され、少年少女の戦績の一部となった。

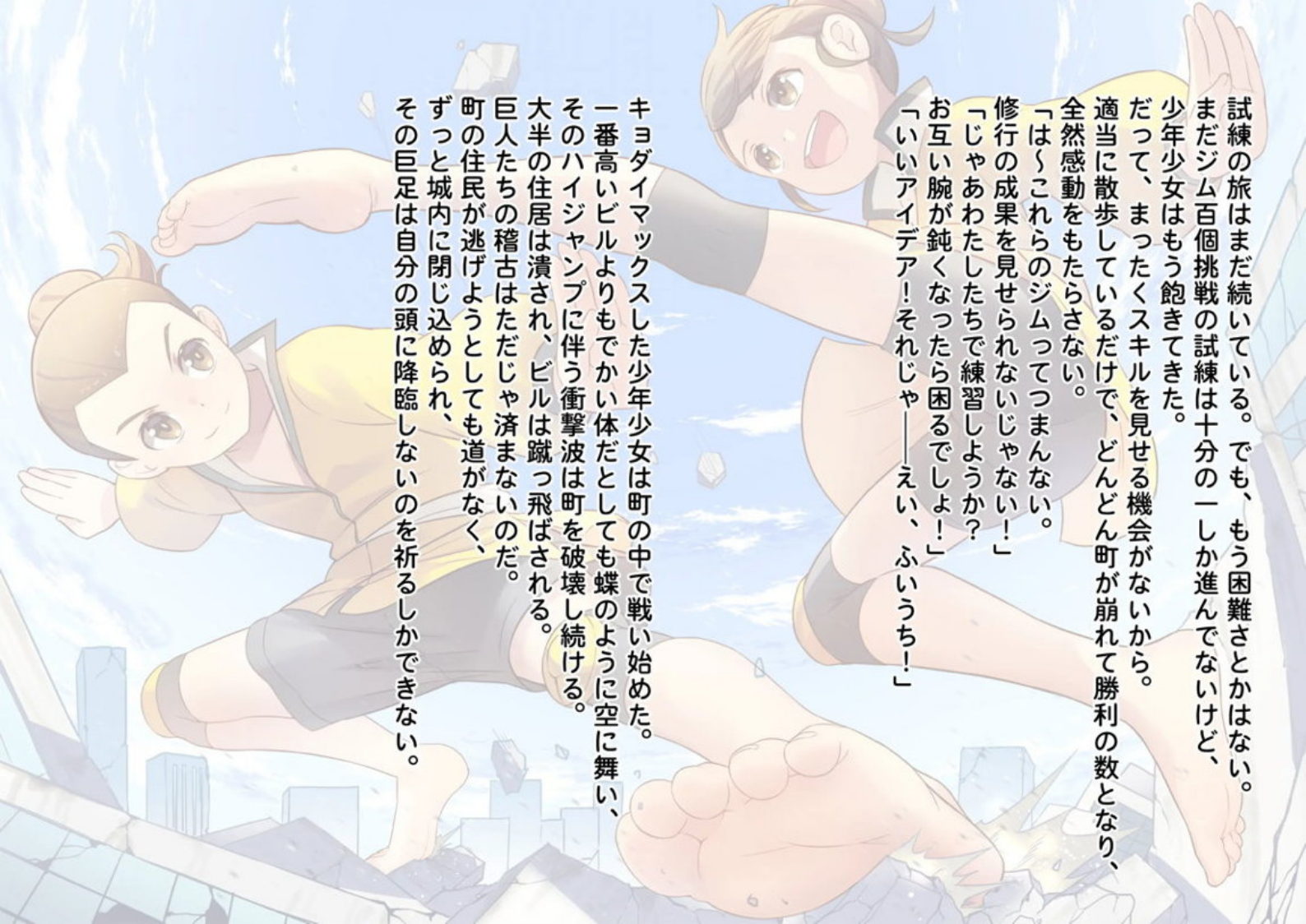
それでもキョダイマックスした少年少女はわからずに破壊し続ける。

すべての建物がマップに消えない限り、彼たちの挑戦は終わらないのだ。









試練の旅はまだ続いている。でも、もう困難さとかはない。まだジム百個挑戦の試練は十分の一しか進んでないけど、少年少女はもう飽きてきた。

だって、まったくスキルを見せる機会がないから。

適当に散歩しているだけで、どんどん町が崩れて勝利の数となり、

全然感動をもたらさない。

「はくこれらのジムってつまんない。

修行の成果を見せられないじゃない!」

「じゃあわたしたちで練習しようか?」

お互い腕が鈍くなったら困るでしょ!」

「いいアイデア!それじゃ——えい、ふいうち!」

キョダイマックスした少年少女は町の中で戦い始めた。

一番高いビルよりもでかい体だとしても蝶のように空に舞い、

そのハイジャンプに伴う衝撃波は町を破壊し続ける。

大半の住居は潰され、ビルは蹴っ飛ばされる。

巨人たちの稽古はただじゃ済まないのだ。

町の住民が逃げようとしても道がなく、

ずっと城内に閉じ込められ、

その巨足は自分の頭に降臨しないのを祈るしかできない。







「あは、楽しかった。あなたも腕は鈍ってないね！」  
「ちょうどこの町のジム戦も済ませたね？  
これも入れたら十回目の勝利だぞ！ちよつと休もうか。」

汗に浴び、蒸気を出し、  
少年少女は運動後の満足感をたっぷりと楽しんでいる。  
破壊された町を見回り、少し休憩できる平地を見つけた。  
視線の届かないところに、まだ離れない住民がたくさんいる。  
それでも少年少女は気付かずに思いつきり座った。  
十分に楽しめたから、仲間のキョダイマックスイーブイも呼び出した。  
巨尻とイーブイに潰された町を除けば、  
遠方からきつと若いトレーナーとポケモンの楽園に見えるだろ？

「やはりキョダイマックスは楽しいな！  
でもクララ先輩からの試練はまだ続けるよね？」  
「このままジムを潰しても楽しくないんで…  
そうだ、『あれ』を発動してみる？」

